
楽園のカフェラッテ！

冬森圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園のカフェラッテ！

【Nコード】

N8857Y

【作者名】

冬森圭

【あらすじ】

道端で少女を拾った。ろくに衣服も身に着けていない、幼い少女だ。身一つの貧相な身なりと、果たしてどこかに監禁でもされていたのだろうか、首輪が掛けられている。少女のつぶらな瞳とふわふわな髪の愛らしさ。そして、ちらちらと覗く尻尾……？ だらんと垂れ下がった耳……？ 少女は全く『犬』だったではないか！ ある日を境にして『犬』が女の子に見えるようになってしまった青年は、その犬——ではなく少女——を連れて帰ることに決めた。そうして彼の暮らす喫茶店は、人と犬とが交差する不思議な場所へと変

わっていったのだ。

01 監禁少女を誘拐することにした

捨てられている。

傍を通りかかった青年は、はじめ一瞥もくれてやるつもりはなかった。

そのつもりだった。

雨は鈍色にびいろの空からしとどに降り注ぎ、青年の帰り道の、アスファルトを叩く。唯一、高架橋のコンクリート天井だけが、水滴から隔絶された空間を提供する。

高架橋の下は、周りに壁も何もないのに、内と外とを隔てているような気にさせた。雨音の一定のリズムは他の音を排他し、逆にこの場所を静かにさせる。雨の打ちつける町は、出歩く人もなく、無人のようだった。それと二人きりのような錯覚を青年にさせた。

この場所へ、同じくして雨をやり過ぎにきたということが、ふと彼の同情心を誘った。

天井の隙間から漏れ出て、所々にできた、水たまりに足を突っ込ませないよう気をつけながら、青年は近づいた。

「大丈夫か？」

それ——少女は、柱の陰にうずくまっていた。返事こそしなかったものの、そっと顔を上げて反応してみせた。

どうやらいちおうの元気はあるようだ。

「おまえ、どこから逃げ出してきたんだ？」

顔を上げたときに、革製の首輪が覗いた。きつく巻かれたその枷は見るに堪えない。鎖で繋がれていたのだろうか。そして何かの拍子にその鎖が外れて、今こうしてここまで脱出してきた、ということだろうか。

人はそれを『監禁』とも言うが。

「……………」

少女のつぶらな瞳がくりくりと見つめてくる。瞬きするのも惜しいと言わんばかりに、じっと目線を離さない。雨に濡れた彼女の髪の毛が、頬に耳に張り付いている。

このままでは風邪でも引くかもしれない。そう思った青年はしかたなく、少女を連れて帰ることにした。

「とりあえず家へ来な。服くらいは乾かしてやるから」

青年は彼女にそっと手を回して立たせ、それから自らの上着を脱いで着せてやった。

ちなみに、これは『誘拐』にはあたらない。なぜなら……。

「あ、ありがとうございます……ごさいます……」

少女の後ろからちらちらと見え隠れしているものがある。青年の手が接触したときから、ぱたぱたと、彼女の尾っぽが振れていた。

そう……彼女は、まったく人間などではなかった！

「高架の下を歩いていこう、いけるとこまで。……おいで」

「……はいっ」

少女は顔をふるふると左右に振る動作をして、水を払い落とそうとした。人のそれとは違う、だらんと垂れ下がった耳が軽快に踊り、青年に飛沫した。

「あう……ごめんなさい……」

ひとまず、家に着くまでの辛抱だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8857y/>

楽園のカフェラッテ！

2011年11月26日17時48分発行